

1 / 6

# 原因不明 超音波で改善

手のふるえに気付いたのは10年ほど前のこと。何もしていないときは問題ないのに、ペンやコップを持つと小刻みに揺れる。それは少しずつ目立ってきた。

大阪市内に事務所を構える



「右手がふるえていたなんて、今では信じられないくらい。変な夢でも見ていた気分」と、笑顔を見せる泉さん

## ふるえ

No.6787



## 医療ルネサンス

る弁護士泉裕二郎さん(66)は、それが気になって仕方なかった。「ただふるえるだけなんやけどね。でも、みっともないし、自分はダメだなんて思っていました。後から考えると、うつ状態に近かったかも」

裁判を終えた法廷で、次の日時を書き留めるのも一苦勞だった。「手帳に無理やり手を押さえつけるようにして、ふるえながら書いてました」。パソコンを使えばマウスが右へ左へ揺れ動き、事務作業もはかどらなかつた。

地元の脳神経外科で本態性振戦と診断された。「原因不明のふるえ」という意

味の病名で、高齢者に多く、65歳以上では5〜14%の人にみられるという報告もある。何かをしようとする手がふるえるのが特徴だ。

「不便だけど死ぬ病気じゃないと聞いて、だいぶ気は楽になりました」

ただ、処方された薬はあまり効かなかつた。何げなくインターネットを見ると、新たな治療法の紹介が目に入った。

「これやっ！」

それを実践する大西脳神経外科病院(兵庫県明石市)に、すぐ連絡を取った。

脳の一部を超音波で焼き、ふるえを止める「集束超音波治療」だ。症状の根本

治療前



治療後



もとの線に触れないように渦巻き状の線を描くテスト。泉さんが描いた線は治療前と後で大きく異なっている(画像は一部修整)

的な原因は分からないものの、脳の視床という部位の決まったポイントを破壊することで止まることは知られている。電極を刺して焼き切る方法があったが、超音波なら頭部に穴を開けなくて済むメリットがある。

泉さんは2016年6月

にこの治療を受けた。正確に照射するために、頭髪をそらなければならぬ難点があったが、「暑くなる時期だから、ちょうどいい」と意に介さなかつた。

治療では、焼く場所をMRI(磁気共鳴画像装置)で精密に確認しながら、超音波をあてる。準備に数時間かかるが、実際の照射は20秒程度。終わった瞬間に、それまでふるえてうまく描けなかつた渦巻きが、描けるようになっていた。

「本当に一瞬の出来事でびっくりしました」。学会の指針で片側にしか使えず、左手のふるえは残つたままだが、利き手が思い通りに動くお陰で日常生活の支障はほとんどなくなつた。

治療した院長の大西英之さんは「まだ長期的な経過は分からないが、この治療の後で症状は劇的に改善する。薬が効きにくい患者にも効果が期待できる」と話している。

(このシリーズは全6回)